

# Haribhadra-sūri のヨーガ考察

— Har. のヨーガ八支研究ノート —

浅野玄誠

## 1

Har. の唱える八支ヨーガを検討するにあたり、Har. のヨーガ観の基底をなす二つの重要な要素を認めねばならない。

第一に Har. のヨーガの目的であるが、これは彼がヨーガを解脱の因 (mokṣa-hetu) [Y-Bindu 3] と規定することに窺える如く、実証的な人間存在の人格的最上位にある「一切知者」の実現にむけるヨーガの修習の導入を意図している。Har. はヨーガ学派を直接に評価することをしないが、Y-bindu におけるサーンキヤ批判に彼の姿勢の一端をみることができる。Har. のサーンキヤ批判の根幹は影像説 (pratibimba-vāda) 批判であるが (Y-bindu 452~456, LDSer, pp. 119~120), そこにおいて Har. が mokṣa の状態に至りつくことのできる人格的最高位の存在を認知し、その道程に重要視されるヨーガの修習を目的としていることは明らかである。

第二に、Har. がヨーガの修習課程を論説して、常にジャイナ固有の 14 徳位 (guṇasthāna) を意識していることを忘れてはならない。それは八支ヨーガに先だつ YDS. のヨーガの三階梯の論説に顕著である<sup>1)</sup>。いうまでもなく Har. が目標とするヨーガは第三の sāmāthyayoga であるが、それはさらに二種、「ダルマの放棄」(dharma-saṃnyāsa) (注(1)-①), すなわちすべての既得の徳目の解離、と「ヨーガの放棄」(yoga-saṃnyāsa) (注(1)-②), すなわちすべての生理的活動の停止に分類される。この二細分は TAAS. 等にもみられるジャイナの 14 徳位の上では、「滅儘と抑止とを本質とする」(kṣayopaśamika) (注(1)-③) 第 9 位以降を示し、さらに、前者は apūrvakaraṇa (注(1)-④), すなわち第 9 位から 12 位、後者は独存位たる第 13 位から yogasaṃnyāsa の完成する第 14 位 (ayojyakaraṇa) (注(1)-⑤) に相当する。

## 2

Har. は YDS. の八支ヨーガ以外にもいくつかのヨーガの階梯を数えあげている。例えば注(1)にみたヨーガの三階梯もそうであるし、Y-Bindu には五種のヨ

一ガが説かれている。

Y-Bindu 31<sup>2)</sup> は adhyātma [内観], bhāvanā [修習], dhyāna [静慮], samatā [平等性], vṛttisaṃkṣaya [業による行為の滅] の五つがこの順序に従って次第に高度なヨーガとなっていると説く。adhyātma に関しては 68~71 頌, 358~359 頌, bhāvanā は 360~361 頌, dhyāna は 362~363 頌, samatā は 364~365 頌, vṛttisaṃkṣaya は 366~367 頌に再考されているが, vṛttisaṃkṣaya を除いては多分にヨーガ学派的用例であり, 特に adhyātma は YS. I-47 に述べる内的清澄 (adhyātma-prasāda) に相当すると思われる。ただし第 5 の vṛttisaṃkṣaya は多分にジャイナのであり, 366 頌 (注(2)-②) は明白に YDS-9 (注(1)) に用いられるジャイナのテクニカルターム, kṣayopāśamika の援用であり, 367 頌 (注(2)-②) は完全知 (kevala-jñāna) の成立による mokṣa の獲得を説いている。これは patañjali にみられないヨーガの設定であり, Har. のヨーガ観の重要な位置を占めている。

## 3

Har. が分類するヨーガの階梯でも, 最も重要なものは YDS. に説かれる八支ヨーガである。YDS. 12~20 には, 先のヨーガの三階梯に引き続きこの八支ヨーガが概説される。

まず 13 頌に mitrā, tārā, balā, digrā, sthīrā, kānta, prabhā, parā の八つが数えあげられ, 15 頌ではそのおのおのが (1) 植物の火 (2) 牛糞の火 (3) 木片の火 (4) たいまつ (5) 財宝の輝き (6) 星の輝き (7) 太陽の輝き (8) 月の輝きに喩えて反復説明されている<sup>3)</sup>。この喩えは前 4 者と後 4 者とを明瞭に区分する働きを担っている。すなわち前 4 者は, 実際に可視的な具体的事実として眼前に展開する火による輝きであり, 後 4 者は反射ないしは具体的な体験を伴わない遠隔の光を間接的に知覚して得る輝きである。実際のところ Har. は, 先のヨーガの三階梯の細分化による分類として, 八支ヨーガの後 4 者が sāmāthyayoga に相当すると考えているようである。

また, 八支ヨーガを 14 徳位との相関の上に考察を試る場合, この部分からだけでは充分な判断は下しかねるが, YDS. 14<sup>4)</sup> に「この世における世俗的見解 (oghadrṣṭi) は mityādrṣṭi と不可分であると知るべきである」と述べられていることは多いに参考となろう。mityā-drṣṭi とは第一徳位, 「邪見位」のことである。oghadrṣṭi は 15 頌 (注(3)-②) の saddrṣṭi と対置される用語であり, 15 頌に八支ヨーガすべてが saddrṣṭi に相当すると述べられる以上, 八支ヨーガは少くとも第二徳位以降を分担することになる。

前4者と後4者との分岐点について K. K. Dixt は第三徳位と第四徳位との間を想定しているようであるが<sup>5)</sup>、今のところ根拠は不明である。ただし Har. が YDS. 19<sup>6)</sup> にみる如く「墮落と結び付き安い」とする前4者でさえも, saddrṣṭi として orghadrṣṭi と区別されている事実は, Har. の八支ヨーガ研究の前提条件として記憶されるべきであろう。

さらに Har. が, このような八支ヨーガを説くにあたり, 他の八支ヨーガ説を多分に意識していることも指摘しておかねばならない。YDS. 16<sup>7)</sup> は「yama」等, 「苦悩 (kheda) を遺棄する」等, 「嫌悪のない (a-dveśa)」等の, それぞれの八支ヨーガを意識していることを表明する偈頌であるが, yama 等はいうまでもなく Patañjali の八支ヨーガ, a-kheda 等は, Har. の別の著作 Śoḍaśaka に説かれる人間の精神活動の中に現れる八つの弱点とその解消の順位を指し示している。a-dveśa 等はいまだ未見である。

## 4

以上, Har. は非常に実証的なサーンキヤ・ヨーガ観を有し, mokṣa の達成という目的をヨーガの修習に課し, ジャイナ教のめざす人格的最上位者としての一切知者の実現という目的のためにヨーガを取り扱い, その上分析的に種々なる側面からの修習の階梯を説くにあたり, 常にジャイナ固有の 14 徳位 (guṇasthāna) を意識しているとみることができよう。

実際 Har. にとって, ヨーガはそうした目的のためには有益な道具として機能し, YDS. 16 (注(7)) にみられる Patañjali 等との対照に窺える如く, 八つのヨーガの分類もすでに世間的に認められている分類法に形式的に追随しつつ, 彼の目的である 14 徳位 の最上位への到達の意味をそこに付加的に反影しようと試みて

	YDS	Patañjali	Śoḍaśaka
1	Mitrā	Yama 禁戒	A-kheda
2	Tārā	Niyama 勸戒	An-udvega
3	Balā	Āsana 坐法	A-kṣepa
4	Dīprā	Prāṇāyāma 調息	An-utthāna
5	Sthirā	Pratyāhāra 制感	A-bhrānti
6	Kāntā	Dhāraṇā 執持	An-anyamud
7	Prabbhā	Dhyāna 禅定	A-ruk
8	Parā	Samādhi 三昧	An-āsaṅga

いるのである。

1) (icchāyoga)

kartum icchoḥ śrutā-rthasya jñānino'pi pramādataḥ/  
vikalo dharma-yoga yaḥ sa icchāyoga-ucyate// (YDS 3)

(śāstrayoga)

śāstradyogas tv iha jñeyo yathā śakty apramā-dinaḥ/  
śrāddhasya tivra-bodhena vacasā'vikalas tathā// (YDS 4)

(sāmarthyayoga)

na cai'tad evaṃ yat tasmāt prātibha-jñāna-saṅgataḥ/  
sāmarthyayogo'vācyo'sti sarva-jñatva- 'di-sādhanam// (YDS 8)

dvidhā'yam<sup>①</sup> *dharma-saṃnyāsa*-<sup>②</sup>*yoga-saṃnyāsa*-saṃjñitaḥ/  
<sup>③</sup>*kṣayo*-<sup>④</sup>*paśamikā* dharmā yogāḥ kāyā-'di-karma tu// (YDS 9)

dvitiyā'*purvakaraṇe*<sup>⑤</sup> prathamā tattviko bhavet/  
<sup>⑥</sup>*āyogyakaraṇād* ūrdhvaṃ dvitiya iti tad-vidah// (YDS 10)

2) ① *adhya'tmaṇi bhāvanā dhyānaṃ samatā vṛtti-saṃkṣayaḥ*/  
mokṣeṇa yojanād yoga eṣa śreṣṭho yatho'-ttaram// (Y-Bindu 31)

② *anya-saṃyoga-vṛttinām yo nirodhas tathā tathā*/  
apunar-bhāva-rūpeṇa sa tu tat-saṃkṣayo mataḥ// (Y-Bindu 366)

ato'pi kevala-jñānaṃ śaileśi-saṃparigrahaḥ/  
mokṣa-prāptir anābhādhā sad-ānanda-vidhāyini// (Y-Bindu 367)

3) ① *mitrā tarā balā dīprā sthirā kāntā prabhā parā*/  
nāmāni yogadṛṣṭinām lakṣaṇaṃ ca nibodhata// (YDS 13)

② *tṛṇa-gomaya-kāṣṭhā*-gni-kaṇa-*dīpa* -prabho-'pamā/  
*ratna-tārā*-*rka-candrā*-bhā saddṛṣṭer dṛṣṭir aṣṭadhā// (YDS 15)

4) *sa-meghā*-megha-rātry-ādau sa-grahā-'dy-arbhakā-'di-vat/  
ogha-dṛṣṭir iha jñeyā *mithyā-dṛṣṭi*-tarā-'śrayā// (YDS 14)

5) cf. LD Ser. No. 27.

6) *pradīpāta-yutās cā'dyās* catasro no'ttarās tathā/  
sāpāyā api cai'tās tat-pratīpātena ne'tarāḥ// (YDS 19)

7) *yamā*'di-yoga-yuktānām *khedā*'di-parihārataḥ/  
*adveśā*'di-guṇasthānaṃ krameṇai'sā satāṃ matā// (YDS 16)

(使用したテキスト)

Yogadṛṣṭisamuccaya (YDS.);

Edited and translated, with Haribhadra's Yogavimśika, by Krishna Kumar Dixit.  
LDSer. 27, 1970.

Yogabindu (Y-bindu);

Edited and translated by Krishna Kumar Dixit. LDSer. 19, 1968.

(大谷大学特別研修員)